

昔むかし、七里に長浜マツタルマンジヨウという人がいました。国一番の長者でしたが、子どもがいませんでした。

ある年の三月三日、マツタルマンジヨウは、妻に向かつていいました。

「わしは、もう四十八歳にもなるのに、わたしたちには子どもがひとりもない。財産を継がせる者がいない。あらん限りのお寺に参つて、神さまの子をもらおうじゃないか」

ふたりは家を出て、すべてのお寺を回つてお願いしましたが、どこへ行つても、

「おまえたちに子はいできない」といわれるばかりでした。

マツタルマンジヨウは家に帰つて来ましたが、ふと、オーシンの寺に行きわすれていたことに気づきました。さっそく出かけて行くと、オーシンのお坊さまが、

「どうしてこんな夜遅くに来られました」とききました。そこで、

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジヨウですが、銭金がたくさんあつても、子どもがいけません。お寺をぜんぶ回つても、おまえたちには子はいできないといわれるので、ここへやつて来ました。どうか、子どもをひとりさずけてください」といいました。お坊さまは、

「では、あなたの子ではありませんが、神さまの子をひとりさしあげましょう。この花を持って帰つて、鉢に植えて枕元に置いて寝るのです。あしたの朝、赤い花が咲いていれば男の子が生まれるし、白い花が咲いていれば女の子が生まれます」といつて、花を一本くれました。

マツタルマンジヨウは、花を大事に持つて帰り、鉢に植えました。その鉢を枕元に置いて寝ると、あくる朝、まつかかな花が咲いていました。

「さあ、妻や妻や、赤い花が咲いているぞ。男の子が生まれるぞ。茶をわかせ、祝いだ、祝いだ」とよろこびました。

まもなく、男の子が生まれました。マツタルマンジヨウは、オーシンの寺に行つて、お坊さまに、「ありがとうございます。男の子が生まれたので、名前を付けてください」とたのみました。お坊さまは、

「あなたが初めて来た日は寅の日、今日も寅の日だから、寅千代丸と名づけるのがよい」といいました。

寅千代丸は、日に日に大きくなって、ひと月経つと一年育てたくらい、一年たつと、十二年育てたくらいに大きくなりました。

七歳になったとき、寅千代丸は、父親に、

「オーシンのお寺に行つて、手習いをしようと思ひます。どうか行かせてください」とたのみました。両親は承知して、寅千代丸をオーシンの寺にやりました。

寅千代丸は、学問がよくできて、じきに、八十五人の弟子たちの中で一番になりました。すると、ほかの弟子たちが寅千代丸をねたむようになりました。

ある日のこと、弟子たちが集まつて、なんとかして寅千代丸をなき者にしようと思ひました。そして、一番年上の弟子が、お坊さまの所に行つていいました。

「お坊さま、寅千代丸は、お坊さまを殺して、自分がお坊さまの位につくといひます」
お坊さまは驚き、

「あいつは、わたしが生ませて名づけてやつたのだ。ここに連れて来い」といひました。寅千代丸は、四、五人の弟子たちに引き立てられて、お坊さまの所にやつて来ました。お坊さまが、

「おまえは、わたしを殺してわたしの位につくといひたのか」ときくと、寅千代丸は、

「わたしは、お坊さまに命をいただいた者です。どうしてそんなことをいひましょう」といひました。けれども、お坊さまは、

「みなが、そういうのだからしかたがない。おまえを三年間、死んだ者が行くハツテンクラ山モーシングスクへ落とすことにしよう。もしおまえがうそをついていなければ、ぶじにこの世に帰つて来られるだろう。うそをついていれば、二度ともどつて来られない」といひわたしました。

寅千代丸は、家に帰つて、

「お父さん。わたしは、学問が一番になつたばかりに、友だちにねたまれて、三年間、ハツテンクラ山モーシングスクへ落されることになりました。お別れの杯をしてください」といひました。父

親は、

「分かつた。では、わしの三頭の馬うちで、一番良い馬を選んで乗つて行くがよい。それから、七人力の刀があるから、それを持つて行け」といつて、送り出してくれました。

寅千代丸は、馬に乗り、刀を持つて旅立ちました。

しばらく行くと、大きな猫が、ゆく手をさえぎり、馬におそいかかつて来ました。寅千代丸は、「わたしは、七里の長浜マツタルマンジョウの子、寅千代丸だ」と名乗りを上げて、七人力の刀で、猫に切り付けました。猫は、

「わたしは、天狗の神をおがんでいる者だが、おまえにはかなわない。早く通つて行け」といつて、息絶えしました。

どんどん進んで行くと、おそろしく大きな犬が、ゆく手をさえぎり、馬におそいかかつて来ました。寅千代丸は、こんどはやられるかもしれないと思いました。けれども、

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジヨウの子、寅千代丸だ」と名乗りを上げて、七人力の刀で切りつけました。ひと打ちすると、犬はよろめき、二打ちすると、たおれました。そして、

「わたしは、天狗の神をおがんでいる者だが、おまえにはかなわない。早く通つて行け」といつて、息絶えました。

それからまたどんどん進んで行くと、大きな牛が、ゆく手をさえぎり、馬におそいかかつて来ました。馬は、立ち上がればたおされ、立ち上がればたおされて、寅千代丸は、

「もう生きては帰れない。こんなあわれな思いをするくらいなら、この世に生まれなければよかった」とさえ思いました。それでも、

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジヨウの子、寅千代丸だ」と名乗りを上げて、「この七人力の刀を見よ」といつて、力の限り切りつけました。ひと打ちしても、牛はびくともしません。けれども、二打ちすると、よろめき、二度うつとたおれました。牛は、

「わたしは、天狗の神をおがんでいる者だが、おまえにはかなわない。早く通つて行け」といつて、息絶えました。

寅千代丸は、またどんどん進んで行きました。すると、ガラスでできたりつばな家が並んでいました。一軒けんの家は、罪人を集めてあり、もう一軒の家では、人びとがお酒を飲んで楽しく遊んでいました。またもう一軒の家では、人びとが集まって歌を作つて遊んでいました。そこを通りすぎた所で、寅千代丸は、ハツテンクラ山モーシングスクの王さまに会いました。寅千代丸は、

「はじめてお目にかかります」とあいさつしました。王さまは、何をしに来たのかとたずねました。

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジヨウの子、寅千代丸というものです。わたしは、オーシンのお坊さまの所で学んでいましたが、学問が一番になったばかりに、友だちにねたまれて、ここへ落とされました。どうぞ、罪人としてあつかつてください」と、寅千代丸が答えると、王さまはいいました。

「どうしてそのようなことをいうのか。早くもどれ。もどつて懸命けんめいに働き、八十八歳になったらまたここへ来い」

そこで、寅千代丸は、もどつて行きました。

帰ってみると、家を出てから三年たつていて、寅千代丸の三年忌きの法事をしているところでした。寅千代丸は、すぐに家に入らないで、馬から下りて、門の所にすわっていました。すると、そ

「こゝ、小さい子どもが、ほうきを持って出て来ました。寅千代丸は、その子に、

「この家では、いま、何をしているのか」とたずねました。子どもは、ふしぎそうな顔をして、

「この家には子どもがひとりいたのですが、その子がなくなつて三年の法事をしているところですよ」と答えました。そして、ほうきを持ったまま家の中にかげこんで、

「表に寅千代丸さまのような人が来ています」ときけびました。父親は、

「ばかをいうな。ハツテングラ山モーシングスクから帰つた者などいない」といいました。

「いえいえ、寅千代丸さまにちがいありません。家を出るときに着ていった着物を着て、七人力の刀を持つておられます」

「なんだと。それなら、かゞで迎えて来い」

父親は、寅千代丸を座敷にあけて、

「もしおまえがほんとうにわたしの息子なら、七本の矢で目を射ても、みなはじき返すだろう。

もし怪しい物の怪あやならば、矢はおまえの目に立つだろう」といいました。そして、寅千代丸に向かつて、七本の矢を放ちました。矢はことごとくはじかれて、家の外へ飛んで行ってしまいました。父親は、

「おお、息子よ。おまえは正直だったので、あの世へ行つても、もどつて来られたのだ」とよろこびました。

あくる日、寅千代丸は、父親といつしよに、オーシンの寺に行きました。

「今、帰つてまいりました」というと、お坊さまは、

「おまえが正直だったので、もどつて来られたのだ。うそをついておまえを殺そうとした友だちは、ほら、この通りだ」といいました。見ると、悪い友だちたちは、七本の矢で射抜かれていました。

村上郁再話

資料『昔話研究4「沖永良部島昔話」』